

Title	昭和二十五年春期川越市喜多院・中院見學旅行記
Sub Title	
Author	雨宮, 泰(Amemiya, Yasushi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.24, No.4 (1951. 4) ,p.151(591)- 152(592)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510400-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東塔は三層であるが各層に裳階をつけ、その小屋根と大屋根が上手に交錯して美しいリズムを奏でている。金堂薬師如来像、東院堂聖観音像は稀代の傑作で、前者は草創當初のものであるか移建當時のものであるかにわかに断じ難いが、圓熟したる白鳳精神が既に雄渾な天平精神を胚胎していることは否定できない。後者は本寺建立よりやや後の時代のものであるろう。

唐招提寺金堂は天平寶字三年の建立で、單層四注七間四面前面一間吹抜き大棟に鴟尾を上げている。立ち並ぶ列柱の上に大きく高い屋根を文える金堂はあくまでも壯麗である。本尊盧遮那佛像が草創以來のもので天平初期のものとは作風を異にする。肥満重厚な塊量、森嚴な相貌を呈している。

法華寺の十一面觀音像は貞觀佛で、天竺訖陀羅國の文答師が光明皇后を拜寫したというのは單なる傳説にすぎない。森嚴な尊容の中に優美な情感を湛えている。

秋篠寺には有名な技藝天像がある。

十一月七日奈良驛より關西線で法隆寺驛下車、金堂や五重塔が遠くから見えていた頃は、驛に近づくにつれ心のときめきと禁じ得なかつたのであるが、金堂は解體され五重塔の修復も未だ成らざる今日、淋しさをどうすることもできない。しかし中門はじめ數多の建築、釋迦三尊像、藥師如来像、觀世音菩薩像（百濟觀音）、玉虫厨子、橘夫人念持佛厨子等建築、彫刻、工藝の諸般に互

る貴重な遺構、遺品にとほしからず、十分これに満足することができた。

法隆寺から聖德太子の夢想三昧定の道場として創建され、天平十一年僧行信が再建した現存最古の八角圓堂である東院夢殿に、彫法が勁直で浮彫的な飛鳥彫刻の特色を具えた觀世音菩薩像（夢殿觀音）を、中宮寺に彌勒菩薩像（傳如意輪觀音像）天壽國曼荼羅瀟帳等を拜し、更に法起寺に飛鳥の三重塔——法輪寺のそれが昭和十九年雷火に失われた今日唯一の飛鳥の五重塔——を仰ぎ、漫歩法隆寺驛へ出て解散した。

きづかわれた天候も行半ばにして回復し、一同元氣に愉快な見學旅行ができたのは幸だつた。最後にこの行種々便宜を與えられた方々に對しあつく感謝の意を表する次第である。

（淺子勝二郎・麻布弘海記）

昭和二十五年春期川越市喜多院・中院

見學旅行記

雨の降る六月十日、他學部學生數名を交へた我々史學科生廿二名は、伊木竹田兩先生指導の下に東上線にて川越市に向つた。

丁度梅雨期のこととして沿線の其所此所に蓑を着けた百姓の田植姿が眺められ、常々都會で勉強し生活する我々にとつては、此の

鄙びた風景も一つの收穫と云へよう。

さて一時間程電車にゆられ、午前十一時半頃かなり激しく雨の降る川越市に到着、直に徒歩にて小仙波の喜多院へ。

喜多院に着くや早速麥湯の接待を受けて中食を攝る。

當寺の濫觴は淳和天皇の天長七年慈覺大師圓仁下向して一字を建て無量壽寺と號すと傳へ、其後兵火に遇うこと一再ならず永らく衰微してゐたが僧正天海が止住したために大いに復興せられたことは周知の通りである。

今日は折悪しく住職鹽入亮忠氏不在のため、前執事木川道晃氏の案内にて見學を始める。

有名な土佐光興の職人繪屏風は上野の博物館に寄託中で見ることができなかつたが、その他の寺の寶をいろいろ見せてもらった。

現存の客殿は寛永の火災後、將軍家光が江戸城内の紅葉山の別殿を移して再建せしめた建物で、家光の誕生の間といふのがあり、狩野探幽の襖繪なども残つてゐる。

兩大師の横に經藏あり和活字版一切經六千三百二十卷、宋版一切經五千四百四卷がある。

慈眼大師廟では天海の木像を見、堂後の尊海の墓にも詣でたが東照宮の家康甲冑の像は遂に見るを得なかつた。

以上一通りの見學を終へ小雨降る仙波の森を抜けて中院に向

う。

中院はもと無量壽寺に屬していたが今では獨立している。

中院では住職以下の接待を受け、古過去帳及び口宣案、令旨以下の古文書を見せてもらい、これに就いて伊木先生より詳しい説明があつた。此等古文書中には當院中興の僧正廣海關係のものが多くあつた。

一時間餘りにわたる見學を終へ、夕方五時頃梅雨に煙る仙波の靈地を後に今日一日の思ひ出を語りつゝ歸京した。

(雨宮 泰記)

昭和二十五年秋期京都奈良方面

見學旅行記

秋期見學旅行の地を京都奈良地方に選び昭和廿五年十月廿日夜八時卅分發急行にて竹田先生を始め學生十數名京都へ向ふ。

廿一日「晴」早朝京都着旅館で休息の後京都大學考古學研究室を訪問、日本、支那、朝鮮の珍品人骨刀銅器錢土器美身具等史學研究上重要な参考品の見學を終へ、修學院離宮の廣大な美しき庭園を見學の後町に出て自由行動をとることとした。或は東山の山莊銀閣、嵐山方面に市内見學に、或は加茂の河畔に夜來の疲れを慰するもあつたであらう。